

『月に吠える』の二三の作品

——『独絃哀歌』との脈絡について——

仲 野 良 一

萩原朔太郎が、その詩集『月に吠える』に、蒲原有明の序文をかかげることをのぞんで、それを依頼しながらはたされなかったことは、のちになっての朔太郎の書簡が発表されたことであきらかなことである。結局、白秋の序文と、犀星の跋文がよせられているのであるが、そののちも幾度か、有明についての称揚の筆をとっている。そのことが有明という先輩詩人にたいして、ひととおりでない心のよせ方をしていたことの証左ということとは、時としてとりあげられていることである。

13 (仲野)
このことについては、洪沢孝輔氏が、昭和四十五年二月『現代日本文学大系四十七 萩原朔太郎・室生犀星』月報と、四十七年十月『読売新聞』で、ややまとまってとりあげ

られている。ついで飯島耕一氏が、五十年五月刊の『萩原朔太郎』の「蒲原有明にさかのぼって」の章で論述されている。そして、伊藤信吉氏の最近(五十一年七月)の好著『萩原朔太郎 1 浪漫的に』の「詩的情操の系譜——蒲原有明の正統ということ——」において、近代詩史の権威者としてのふかい洞察による論考をみることができる。

朔太郎が、先輩詩人有明についてのべたものの最初のものは、福原清宛の書簡であり、それが朔太郎の希望によって、『羅針』第五輯(大正十四年四月)に、「蒲原有明に帰れ」という、福原清の作題をつけられて掲載されたということである。(『萩原朔太郎全集』第六卷 筑摩書房版 以下『全

集』と略記)

蒲原有明は僕の崇拜する唯一の詩人。貴君がそれに着眼されたるは流石です。実をいへば詩集「月に吠える」出版の時、序文を是非蒲原有明先生にたのみたく再三書簡を以つて懇願したるも返事を下さらないので、遺憾ながら意を果さなかつたやうなわけです。かく僕が蒲原氏の序を切望したるは、僕の詩を以て蒲原氏の新しき正派を自任したからです。有明詩集中、独絃哀歌あたりの作品は実に名篇であつて、今よんでも涙が出るほど好い。何と言ふか、情緒が濃厚でしかも神秘的であつて、あたかもポオの恋愛抒情詩の如く、それで東洋風の香気が強い。「恋」の神秘にして甘き情緒は、僕、有明によつて始めて知れり。この恋の如く神秘的にして、本質的に音楽の情緒に近いものはない。僕の「月に吠える」中なる二三の作品の如き、正にこの神韻を摸してこれを俗化せるものなり。(中略)

僕が露風氏等の所謂「象徴詩」を痛撃したことが、間接に蒲原氏の耳に誤伝され、当時既に詩壇を退いてゐた蒲原氏にまで誤つて自家のこととして偏解されたらしい。風説によれば、僕からの序の依頼をみて蒲原氏曰く「人の芸術を悪罵しておきながら、その同じ

人に対して序をたのむとは凶々しい奴もあつたものだ」と言はれたさうです。(中略)

とにかく蒲原有明氏は、今日の詩壇の先駆者であつて、永遠に価値を有する天才です。今日の無内容な詩壇に向つて言ひたいことは、実に一語「蒲原有明に帰れ」である。(傍点原文のまま)

とにかくこれは、最高の贅辞であり、「かく僕が蒲原氏の序を切望したるは、僕の詩を以て蒲原氏の新しき正派を自任したからです。」というにいたつては、直接の師にあたる北原白秋についてさえ、そういういい方での称揚はなかつたはずである。

有明は、『四季』萩原朔太郎追悼号(昭和十七年九月)に、追悼の一文をよせているが、そういうことにはふれずに、

萩原君の第一詩集『月に吠える』を当時同君より寄贈をうけて読んでからすでに三十余年の長日月が経過してゐます。ただ集中詩篇のわずかに、異常な意志のちからと張り切つた神経の作用とを感得、ここに新詩人の出場をはつきりと見てとりました。

とだけ追懐し、朔太郎からの序文依頼のことについてもふれていないのである。なお、その後半で、

萩原君と一度会談したかどうかといふ疑問

で、全く思ひ惑つてゐましたが、先日貴社の塚山君がお見えになつたをり、山妻立会ひだんだん話を進めましたところ、当地で十余年前の或日萩原君の訪問をうけたことが判つてきました。

とあることで、朔太郎は昭和五、六年頃、つまり昭和四年十月に第二のアフォリズム『虚妄の正義』刊行ののち、昭和五年『恋愛名歌集』執筆、六年五月刊行の前後あたりに、有明を静岡の寓居におとずれていることになる。

朔太郎の書簡については、種々の問題の示唆をふくんでいるのであるが、まず具体的な作品の問題として、朔太郎のどの二、三の作品が、有明の作品と直接の脈絡をもっているかということである。

渋沢孝輔氏『極の誘い』では、これに具体的にふれることはない。飯島耕一氏『萩原朔太郎』でも、

それにしても有明の詩の朔太郎への具体的な影響となると、容易に言及しがたい。朔太郎が自分で言うように、恋愛の情緒を神秘的に音楽的にうたう、というところに求めるしかないようである。『月に吠える』では「雲雀料理」「焦心」「愛憐」「恋を恋する人」「五月の貴公子」「青樹の梢をあふぎて」などが恋愛詩と言えるだろうが、とくに有明の影響といったもの

は感じられない。

というところまで、それ以上の具体的な指摘にまではいたっていないのである。

伊藤信吉氏『萩原朔太郎 1』では、飯島氏のそれとは多少よりどこをすらしめて、朔太郎書簡の、「蒲原原氏の詩風は浪漫的にして、しかも情緒の濃厚なる神秘的気韻を特色とする」ところに詩的個性のよりどころをもとめていゝ。そして、

そういう面からすれば「笛」「天上縊死」「天景」などが、そこに通じる作品といふべきかもしれない。として、有明の第一詩集『草わかば』の「野路よりひとり」を、朔太郎が晩年にいたるまでこれを愛誦したことなどをあげ、

この詩の情緒はまさしく優婉であり、典雅であり、有羞の美であり、音楽的である。これらのことから総括すると「蒲原氏の新しき正派」の意味が、多少とも分るような気がする。

とされている。

ここでもういちど、朔太郎の書簡「蒲原有明に帰れ」にもどらなければならぬ。

まず、朔太郎のことばのままに、そのよりどころとすべきところを抽出すると、「有明詩集中、独絃哀歌あたりの作品は実に名篇であって」「情緒が濃厚でしかも神秘的」「『恋』の神秘にして甘き情緒」「本質的に音楽の情緒に近い」というところであろう。

朔太郎が、有明の『草わかば』『春鳥集』『有明集』のいずれでもなく、第二詩集の『独絃哀歌』をとくにとりあげていることに、まず注目しなければならぬ。

それは、書簡中の、
蒲原氏の詩風は浪漫的にして、しかも情緒の濃厚なる神秘的気韻を特色とするのに、露風一派の所謂「象徴詩」なるものは、全然古典的、理智的にして、何等の夢幻的情想も浪漫的情調も有せず、むしろその正反対なる峻肅端麗なる理智的格調の美に長所を有するの
で、あたかもフランス詩壇における高踏派(象徴詩派前派)の如し。

という評言は、理解にくるしむところもあるが、すくなくとも、象徴詩人有明詩の精髓ともみられている『有明集』についてのものでないことはあきらかである。評言のことばどおりうけとるとすれば、むしろ、おおまかには「峻肅端麗なる理智的格調の美」というような、露風の詩風に

ついでの評言は、そのまま『有明集』のおおくの詩にあてはまるようにもおもわれるのである。

『独絃哀歌』が、ロッセッティの影響がいちじるしく、八・六行二連だての詩形のあたらしい工夫がなされ、ソネット形式がとりいれられ、有明特有の象徴詩風のさきがけとなつたばかりでなく、新体詩から近代詩への展開をみせる詩集であることは一般のみるところである。

詩集中、とくに朔太郎のいう、「情緒が濃厚でしかも神秘的」「『恋』の神秘にして甘き情緒」「音楽の情緒に近い」「浪漫的情調」などという詩想詩韻をそなえているとしてよい作品をもとめれば、有明がその詩集名とした冒頭のソネット形式の「独絃哀歌」(十五首)の詩章の作品をかかえねばならないことになる。

詩集後半に配せられている「紫蘇」「恋の園」「歓楽」「幻影」「星眸」「小鳥」など、それぞれに優婉、清純、哀切、幽邃の詩美をそなえる作品ではあるが、その制作時期からいって、『草わかば』にもれたものを採ったとおもわれるものもあり、ともかく『草わかば』的な詩情詩想の方にちかひものである。恋愛を主題にした作品でありながらも、朔太郎書簡のことばにあるような条件をおおよそそ

なえた作品とはいいがたいのである。

たとえば、次の小曲のごとき、有明特有の意識の翳りをもちながらも、『草わかば』調そのものとしかいうことのできない一例である。

紫 蘇

黄なる小草とみだれあひ、

紫蘇の葉枯るる色見れば、

なども野みちにたたずまれ、

かばかり胸の悲しきや。

わかれし人の面影の

ここにもうつるわりなさか、

それにもあらでかかる日に

かかる野みちのいたましき。

黄なる小草と、紫蘇の葉と、

この日この野に枯れみだれ、

日は秋に伏す路遠く

いづこより曳く愁なるらむ。

藤村『若菜集』中に配しても不審をもたれることのない体の詩篇である。

「独絃哀歌」十五篇のうち、その詩想での濃淡はともかく、その心意として恋愛にかかわるものをうたった作品とおもわれるものは、「薔薇のおもへる」「別離」「浮世の恋」「よきしほ」「蓮華幻境」「草やま」「君も過ぎぬ」「頼るは愛よ 一、二、三」「天平の面影」などである。いわゆる「独絃調」の中核ともいえるべき作品である。そのうちの二篇をひくことにする。

蓮華幻境

わが胸池水湛へ、時としては

たましひ 精魂ここに紅蓮の華とぞ生ふ、

しのびに君よ、この岸かの水際に

まぼろし 幻影ふかき生命の香をたづねよ。

この時音も幽かに大蓮華の

蕾の夢さめ、人をなつかしみて

「かなたへ、君よ南へ、緑の国、

情の日の彩饒き空の下へ。」

声音もかくいと熱く誘ひなせば、

君はたせめていなまし——「さらば彼処、
焰の愛のこころの故里へぞ。」——

ふたたび、嗚呼、また三度語るを聴け、

「樂園涅槃の土にはふところ、

歡喜尽きぬ種子こそ常花発け。」

十五篇中の第八番目に配せられた作品であり、与謝野鉄
幹、綱島梁川ともに推賞するところであった。なお、

頼るは愛よ——三

何ゆゑ泣きし涙と今また問ふ、——

知れりや汝よ、かつては世のくらさに

萎れしにほひの夢よ、——ありしその日

短かき歓楽あかぬ契のすゑ、

零ちたる影や紀念の花小草よ、

回憶——そはいと深き林なれば、

黒羽の懊惱さまよふ彼の日にわが

汝が身のうへにかけにし涙のそれ。

さこそは、さこそは愁き露なりけめ、

涙や、しほや、——さはあれ高き愛の

涙滴それぞれと汝もたのみけむか。——

小草よ、花よ、今日こそただへまつれ、

わびしき暗とかげとのへだて脱ちて

この岸光あふるる天の泉。

「独絃哀歌」の第十三番目に配せられている。

綱島梁川は、『明星』（明治三十六年十月号）の『独絃哀
歌』評で、「門外生」の署名で凱切な批評をしている。

清新あり、大胆あり、優婉あり、高華あるが中に、

その特に際やかなる姿は、幽情なり、遠神なり、揺曳

なり、浮動なり、夢なり、幻なり、匂いなり、影の底

なる影なり。神秘の一絃微かに心情の奥に鳴つて、雲

にも水にも微韻のゆらぎしるきはこの集の風情に候。

しこうしてその一味彷彿の宗教的情調はた、実にここ

に根ざせるなり。およそ真摯に心情の深きをたどり

て、そこなる生命の声に調べあわする詩人が、我れ知

れず宗教の精彩に迫るは極めて理りかと存じ候。

梁川が、有明作品の底に、ある度しい宗教的な想念の沈

潜し纏綿することに注目していることをべつにすれば、そ

の詩想詩情のうけとりかたについては、その書簡に強調し

ようとするところとほとんどかさなりあうものとみること

ができるのである。

朔太郎が、「『月に吠える』中なる二三の作品として、『正にこの神韻を摸し』たとする有明の作品は、『独絃哀歌』中でも、それらの詩篇にもとめるべきであろう。

さきに、『独絃哀歌』から影響をうけた『月に吠える』の作品として、飯島氏は、恋愛詩として、「雲雀料理」「焦心」「愛憐」「恋を恋する人」「五月の貴公子」「青樹の梢をあふぎて」などをあげながら、「とくに有明の影響といったものは感じられない。」とされ、伊藤氏は「笛」「天上縊死」「天景」などをあげられていることをのべた。

飯島氏のばあいは、朔太郎の評言をよりどころにされながら、恋愛詩とおもわれるものを提示されただけで、有明詩との脈絡を指摘されてはいない。

伊藤氏のばあいは、影響とまではいわれていないが、朔太郎が有明詩を、「浪漫的」「情緒の濃厚なる神秘的気韻」としたところをおさえての指摘である。

天上縊死

遠夜に光る松の葉に

懺悔の涙したたりて

遠夜の空にしも白ろき

天上の松に首をかけ。

天上の松を恋ふるより

祈れるさまに吊されぬ。

三篇中、ひきあいにはだされることのおおい作品である。みにくいはずの縊死のすがたを、つめたく清浄なヴィジョンとして形象化して、しかも七五文語定型の詩律が、作品を凝縮した気品の輪郭にしたてあげている。

『詩歌』大正四年一月号に、「笛」その他の作品とともに、末尾に「浄罪詩篇」と付記されて発表されたものである。朔太郎の、当時の宗教的——はつきりとしたキリスト教の信仰をもっていたとはいえないが、——な心意が、みごとに詩的造型によって彫塑されているのを見る。そして、有明詩についての、「浪漫的」「情緒の濃厚なる神秘的気韻に通じるものをもっていることもみとめられるのである。しかしながら、その評言の重要な一面であるはずの、『恋』の神秘にしき甘き情緒は、僕、有明によつて始めて知れり。」「この神韻を摸してこれを俗化せるものなり。」と、はつきりと提示しているものにあたる詩想詩情をよみとることはできないのである。

「笛」「天景」の二篇についても、同様にみることにしかできないとおもわれる。

伊藤氏はなお、有明の『草わかば』の「野路よりひとり」を、朔太郎が晩年にいたるまで愛誦したことをもむすびあわせて、「これらのことがらを総括すると『蒲原氏の新しき正派』の意味が、多少とも分るような気がする。」とされているところからすれば、朔太郎の「二三の作品」というものの脈絡の在処を、むしろ特定の箇々の作品にかざることなく、『草わかば』の作品までをふくめた、ひろい意味での有明詩の詩的個性について、朔太郎との詩的系譜をたどらうとされているのであらうとおもわれる。そういう視点に立つてのふかい示唆をうけるものである。

さて、飯島氏の、「とくに有明の影響といったものは感じられない。」としながらも、『月に吠える』中の恋愛詩として指摘されている五篇の作品についてかんがえねばならない。その一篇に、「青樹の梢をあふぎて」(『感情』第二年二月号・大正六年二月号)がある。

青樹の梢をあふぎて

まづしい、さみしい町の裏通りで、

青樹がほそほと生えてゐた。

わたしは愛をもとめてゐる、

わたしを愛する心のまづしい乙女を求めてゐる、

そのひとの手は青い梢の上でふるへてゐる、

わたしの愛を求めするために、いつも高いところで、や

さしい感情にふるへてゐる。

わたしは遠い遠い街道で乞食をした、

みじめにも飢ゑた心が腐つた葱や肉のにはひを嗅いで

涙をながした、

うらぶれはてた乞食の心でいつも町の裏通りを歩きま

はつた。

愛をもとめる心は、かなしい孤独の長い長いつかれの

後にきたる、

それはなつかしい、おほきな海のやうな感情である。

道ばたのやせ地に生えた青樹の梢で、

ちつぽけな葉つばがひらひらと風にひるがへつてゐ

た。

この詩をふくむ「見知らぬ犬」の詩章の八篇の作品は、すべて大正五、六年の初出であり、そのうちの数篇は、『月に吠える』の末期で、『青猫』への移行の時期にあるものであるということである。そして、この時期の作品に、この詩と同類のモチーフをもつ作品をみる事ができないことに、よりどころとしての不安があるのであるが、スタイルはべつとして、その詩想において有明詩と通ずるものがあるのを見ることが出来る。

ふたたび有明にかえらねばならない。さきにひいた有明の作品「蓮華幻境」「頼るは愛よ——三」の二篇には、比較的、恋愛感情、というよりも、むしろ心意としての恋愛がはっきりとうたわれている。詩の情調としては、この世の愛の美しさを否定することなく、むしろ、その美しさに誘引するかのよう展開する。作品によっては、官能的にさえそれをうたうことをわすれない。しかし、その美しさとともに、また一方、生においての世のつねの恋愛の甲斐ないことをうたうのを詩想の軸としているのである。そういう心意のまつわりにおいて、朔太郎のいう「神秘的」な詩美をよみとることが出来るのである。

『独絃調』ソネットの中に靈的生活についての祈りが

色濃く映っている」(『日本の詩歌』2 安東次男)のである。そういう心意と情念とのもつれが、婉美、愉悅、悲哀、憂愁、懊惱の糾いをみせるあいだに、ともすればやや晦渋な文脈の接合をゆるして、生の意識ともいふべき主題へと展開収束する。その気負が、「優婉」「高華」「揺曳」「影の底なる影」「微韻のゆらぎ」「一味彷彿の宗教的情調」をただよわせる。しかもその心意が、おおよそそれまでの新体詩にうたわれることのなかった、有明個有の秘奥の心意が、ふかい陰翳となっているのを見る。

朔太郎が、「情緒が濃厚で神秘的」として、ひかれるところがあったものは、そういうところにあるとおもわれる。

「青樹の梢をあふぎて」にうたわれている心意としては、「かなしい孤独の長い長いつかれの後にきたる」のおもいが、全篇にしみわたっている。しかし、その主題はあくまで、愛をもとめるころであり、それはただの日常的世間的な愛をもとめるころではなく、「わたしを愛する心のまづしい乙女」をもとめるころである。

そして、それは非實在でありながら、よびもとめられるものであり、しかもなおいふならば、『新約聖書』の「山上の垂訓」が、朔太郎の意識にあったであろうこともかん

がえられる。

飯島氏の提示されたおなじ恋愛詩篇中の「愛憐」にも、
そのような心意がひそんでいることをみなければなら
ない。

愛 憐

きつと可愛いかたい歯で、
草のみどりをかみしめる女よ、
女よ、

このうす青い草のいんきで、
まんべんなくお前の顔をいろどつて、
おまへの情慾をかぶらしめ、
しげる草むらでこつそりあそぼう、
みたまへ、

ここにはつりがね草がくびをふり、
あそこではりんだうの手がしなしなと動いてゐる、
あわたしはしつかりとお前の乳房を抱きしめる、
お前はお前で力いっばいに私からだを押しつける、
さうしてこの人氣のない野原の中で、
わたしたちは蛇のやうなあそびをしよう、
ああ私は私できりきりとお前を可愛がつてやり、

おまへの美しい皮膚の上に、青い草の葉の汁をぬりつ
けてやる。

「さびしい情慾」の詩章の六篇の冒頭に配せられてい
る。初出誌は未詳である。詩集中のこの詩の次に配せられ
た「恋を恋する人」との二篇が、『月に吠える』出版直
後、当時のきびしい検閲制度による風俗壊乱という理由に
よつて、詩集が発売禁止になったという作品である。

「双方の衝迫した盲目的な欲望の息づかいさえもが伝わ
つてくるようだ。」(『現代詩鑑賞講座』5 藤原定)とされ
るように、ひととおりはエロティックな官能そのもののヴ
イジョンであるとうけとられやすいのであるが、「この凡
庸な欲情をひとたび作品化するとき、詩人は、はっきり醒
めた意識で、非凡で的確な詩的表現にまでそのモチーフを
昇華し得ているのだ。」(『近代文学鑑賞講座 萩原太朗』那
珂太郎)のすぐれた洞察にしたがうべきであらう。

恋愛詩を、まことしやかにうつくしげにうたうことをせ
ず、情慾を感覚だけにたよつてうたうがゆえに、この作品
には、陰湿さや猥雑さはないのである。むしろ、「情慾の
感覚的聖化が行われたといつてもいいほどだ。同時にその
情慾にはどこか一脈の空虚感が伴っている。」(『病める魂と

漂泊者の歌「亀井勝一郎」というのは、作品の情調であるとともに、朔太郎自身の心意の底にひそむものであったであろうとおもわれる。「青猫」において、あれだけ倦怠と疲労と鬱憂とをうたいながら、たえず「靈魂ののすたるぢや」をもとめつづけたことにつながるものがあるとかんがえられる。

「青樹の梢をあふぎて」が、非實在の愛をあわれげにもとめたのにたいして、「愛憐」にあっては、實在の感覺を刹那のつよさでうたうことによつて、そのせつない空虚さのゆえに、それとなく非實在の愛をもとめることのふかさをうかがわせるのである。

そのような詩想の底にある心意は、詩想そのものにはそれぞれの主題をもちながら、靈的なものを志向する心意の秘奥を、いみじくもうたいこめていふことと通じるものもある、とするのは、あながち恣意な理路によるものでもないであらう。

いであらう。

ただこれらの作品のおもてには、朔太郎のいう神秘とか神韻とかのことはでとらえられるような、はっきりとした情調はみられない。しかし朔太郎は、「これを俗化せるものなり」とことわっている。そこに謙遜の意味をふくめてのことばであるということもかんがえられるが、むしろ、有明と自分との作品の本質的な様態の相違を、はっきりと提示したうえで、有明の正派としての詩的系譜の繼承をのべたつもりであらうとおもわれる。ほとんど文字どおりに、俗化と解釈する方がまちがいがいである。

このように断定的にかかわりをつけることは、すこし唐突のきらいはある。しかし、いずれにしても確乎たる脈絡をみつつけることの、決着のつかないこのような問題の、ひとつの方向をたどっていったまでである。

(本学教授 国文学)